

夢と虚無の彼方と現実世界：ドストエフスキの『作家の日記』の多様性(2)

立石, 伯 / タテイシ, ハク / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

1999-07-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020067>

夢と虚無の彼方と現実世界

——ドストエフスキイの『作家の日記』の多様性(二)——

立石 伯

(二)

ドストエフスキイの基本的な発想法は、常に刻下の現実から出発することである。小説の場合も、評論などの場合も同様である。ただし、これから素描するように、表現された世界は、たとえば同一の追究テーマであれば、小説と評論において当然相似形を見せることもあるが、ときには極度の差異を示すことがある。この目眩く差異のかたちにこそ、彼の発想と想像力の発現の特徴と独自性があり、芸術家としての特異性がかくされているのである。いいかえれば、彼の小説に面するときの創造的想像力の発現のあり方と、ジャーナリスティックな文章、またイデオロギイシユな文章における現実認識の方法や論理構築との差異や落差の大きさや深さが顔をのぞかせている。矛盾・対立の恐るべき創造性と極度の固陋の極端な両面性にほかならない。

彼は、明確な時間・空間の限定のなかでの人間と世界の諸相を凝視した。歴史的認識として自分の生きている十九世紀を軀全体で受けとめた。スラヴ民族の民族性を尖鋭なかたちで継承

しつつ、ヨーロッパとアジアの特質をそれぞれ備えているロシアの現実には呻吟しつづけた。湿地帯を埋め立ててつくられた人工的で空想的な海にひらかれた都市ペテルブルクと、伝統的な内陸につくられた城塞都市モスクワを中心とした民衆と知識階級のありようをとことん抉りだそうとした。

さて、ここで『作家の日記』のしめすもう一つの貌を見ようとする、『作家の日記』発刊の出発点や位置、めざすべき方向性などが明快に語られていることがわかる。その核心に位置するもの、あまりにもリアリスティックな実像についてさらに語らなければならぬ。

彼は断るまでもなく、さまざまに機会に《現実》と《空想》について語った。この『日記』にもこのついでに何気ない形で触れている。というのも、もの見方の根源や現象の相をめぐりだす深さをなおざりにして、皮相な現実の相を、あたかも現実の真実のごとくに想いなししている芸術家が目障りなままなかつたためである。さまざまに転変をくりかえす、現実ばかりでなく、歴史的事実や、もつとも重要な人間の生と存在の根源がゆがめられてしまうと考えていたからにほかならない。

ついでに触れておいたという類であれ、大切な観点なので、そのいくらかを引用して再確認しておきたい。どちらも、ときどき彼についての論で引用される文章であるが、よくかみしめて味わうべき深い認識が刻印されている。初めの文章は、一八七六年三月第二章1であり、つぎは同年の十月第1章3である。

「現実以上に空想的な、思いがけないものがどこにあるか？
現実以上に真実らしくないものがどこにあるぞ？
現実が毎日、最もありふれたことのような体裁で、幾千となくわれわれに提出しているとおびなこともは、小説家などには想像もつかない。時には、いかなる空想力をもつてしても、考え出せないようなものがある。小説なんかより、どれだけ優れているかわからない！」

「まったく、現実生活のうちから、一見たいしてぱっとしないような事実を捉えて注視してみると、その当人に能力と目さえあれば、シェイクスピアにもないような深さをその中に見いだすであろう。しかし、問題は、——だが、その眼識を持ち、だが、その実力を有するかにあるのだ。なにしろ、芸術的作品を創造して書くどころか、単に事実を認識するのにさえ、一種の芸術家であることが必要なのである。(中略)とはいえ、われわれはどうていあらゆる現象を汲みつくし、その根源と結末まできわめることができなものはもちろんである。われわれに知り得ることは、ただ生活に交渉のある、目に見える現在の象のみで、しかもそ

れさえ皮相の見方にすぎず、根源と結末にいたっては、いまだ目下のところ、人間にとって幻想的なものなのである。」

引用した後者の見解は、ある種パスカルの極大と極小をきわめることのできない人間の《中間者》性を髣髴とさせる認識かもしれない。ともあれ、彼のように想像力の極致として、「おかしな人間の夢」などをかく作家であるからこそ、右のような空想——ここでは想像ないしは創造的想像力とよんだほうがよろうが——に対する現実というものに絶対的な優位性をおく考え方を信頼できるのである。現実の圧倒的な力を主張するものも多くは、その多彩な、想像を絶したあり方の機微を知るよりも、単に現実に対する敗北と想像力の卑小性を語っているにすぎないのである。

短篇小説群の秀でた特質について語ることは、ただちに『作家の日記』の現実的諸認識にたいする芸術的卓越性を述べることではない。一般的にいつて、彼が監獄においてかの信念の更生を体験して以降の、進歩主義、唯物論的見解、科学主義、芸術上の功利主義などに対抗して、芸術を芸術として貫徹する意味での芸術的至上観をもつようになったのは、『死の家の記録』『地下生活者の手記』などを引きあいだして論じるまでもなく、すでに見たように解りやすい消息である。

彼は何よりも小説家であった。ジャーナリストでありつつも、小説家の資質がせり出してきた。ヨルカに召された少年を描いたとき「わたしは小説家だから創作するのが商売なのである。」

というしごく単純な述懐をみればたりる。ミハイル・バフチンが、イデオロギイに対する芸術の勝利として、「おかしな人間の夢」などを賞賛するのは、彼の芸術世界の全体的な展望のなかで、一定の意味があるといえよう。たとえそうだとしても、逆に、驚くべき想像世界を創り出した小説家でありつつも、卓越したジャーナリストでもあつて、芸術家であることのみを強調することでは現実世界で呼吸したドストエフスキイの息吹がきこえてこないであろう。というよりも、彼の発想と思考の経路は、きわめて現実的・具体的に物事を見、考え、判断し、認識し、論証し、説得することにある。それに彼は喜びすら感じる。喜ぶことは同時に悲しむことであり、痛みを感じ悩むことでもあり、幸せや安寧を感じることもある。彼はそれを全体的に生きたのであつて、高みから、あるいは客観的に俯瞰して、批判や非難しているのではない。それが当時の文化界において、さらには現在から歴史の推移のもとに判断して、いかに間違つていたにしても、偏見に満ちたものであつたにしても、そういうことは、生きている人間のだれもが犯す過ちにすぎない。優れた予見や予言的言辞もやはりそうである。

つまり、彼はロシアの運命と、ロシア人の未来と、キリストとキリスト教の——いやロシア正教の——いべきかもしれない——あり方と未来性と、何よりも自己の内面性と内的意識のありようとその未知の暗闇をこそ凝視しつづけたのである。その結果、ロシアの全人類的傾向、つまりロシアとヨーロッパに向けての新しい言葉の発語、全人類的な思想の構築、新しい力の発露などを真剣に考えたのは、彼のほかそれほど多いとはいえない。

ない。ロシアに固執することによつて、逆にある普遍的な発想と思考と認識をうみだしていたといふべきなのである。

彼がロシア人の問題を考えるときに、まずロシア語とヨーロッパ語（フランス語、ドイツ語など）について考察したのは、的確であつた。「悪霊」のスタヴローギンのロシア語の語法や文法に関する無知と誤謬をあえて注記した語り手の認識とほぼ等しい考え方を七六年七月・八月第3章の『日記』の中で、人間は必ずどれかの国語で思索するものであり、言葉が思想の形式であり、肉体であり、包皮であると強調してつぎのように提示する。「ロシア人は、少なくとも上流階級のロシア人は、大部分もうとつきの昔から、生きた言葉を持つては生まれず、後になつて一種人工的な言葉を獲得するばかり、そして、ロシア語さえも、ほとんど学校へ行くようになってから、文法で覚えるのである。」感性と発想の基礎をささえる母国語の根幹について注意を促すのをだれとて否定できない。というよりも、感性に導かれた独自の思考を形成する言葉の力について、彼があえて紙面を費やして注意するのは、時間の無駄であるといえようが、一方当時それほどひどい状態に陥つてゐるといふ彼の認識が浮彫りにされよう。

彼にとつて、生きた言葉は、年代記や英雄叙事詩、民話、口承伝説などのなかに刻印されているし、なによりも、ロシア民衆の生き生きとした生と存在の流れのなかにあると考えられていた。そこにキリストやマリアなどについての独特のイメージや大地に足をつけたロシアの民衆の血や精神などが、滔々と流れてゐると感じとられていた。

さらにいえば、ロシア人であることを感じることは、スラヴ民族のありように思いをはせることでもあった。言葉、宗教などから民族のありよう、いささか飛躍的で唐突な感じをうけるかもしれないが、彼の執筆している時期から二十年ほど前のクリミア戦争の敗北などに象徴されるスラヴ民族対トルコ民族、いわばキリスト教対イスラム宗教、あるいは国家間の対立など大きな歴史的・地理的構図が浮かびあがる。ここに彼の《近東問題》が収斂されるのである。そして、その問題が永遠に解決できない謎めいたものとして横たわりつづけているという認識を醸成する。

彼が永遠の謎でありつつ、少しでも見通しをえたいとした近東問題について素描しておこう。というよりも、『日記』をつらぬくイデオロギイは、ほかでもない十九世紀後半期のバルカン半島や近東の軋轢を背景にしているというべきであろう。民族問題と国家間の戦争である。まず理念としてのスラヴ民族の大同団結を主張する思考の構造を確認しておきたい。

「ロシアは全スラヴ民族と提携し、かつその領袖となつて、いまだかつて発されたことのないような、偉大きわまりなき言葉を世界に告げるであろう。しかも、その言葉こそは一般人類大同団結の鍵となるものである。(中略)スラヴ主義者の理想は、虚偽もなければ物質主義にも支配されない、真の博大な愛の精神による結合である。全スラヴ族の自由な連盟の領袖としてのロシアが、西欧にしめすべき任務を有する、個人的寛容の模範を基礎とする結合である。」(一)

八七七年一月第2章1)

彼のイデオロギイの構造の核心にあるのは、一つの理想を實現すること、つまりはスラヴ民族の大同団結の道と方法の探求であり、ギリシア正教を信仰する諸民族の運命と未来を擁護することではしかない。キリスト自身の擁護ということでは、彼の内面では少・青年時代からのものであり、彼の『貧しき人々』を見出したベリンスキを困惑させたものである。もとより、彼のキリスト観は、幼少年期においては、当時比較的恵まれていた家庭における宗教意識のもとで培われていたものに相違ない。確乎たるギリシア正教擁護としての、ローマン・カトリック、あるいはイスラム教などに対する批判や、西欧派の無神論・唯物主義などへの対抗ではなかったはずである。彼の精神の根源にひそむ無意識的なロシア人の伝統的なあり方であり、血の流れである。彼はロシア正教の根本信条をつぎのように把握している。まず、《全宇宙に彼をおきて人間の霊を救い得ん名はなかるべし》という認識がある。「彼」とはもとよりキリストにほかならない。

「それは革命の形態をとっているのではなく、かかる全世界的人類更新の思想が当然とるべき形態、すなわち神の真理の形態、現在完全に正教の中に保存されており、いつかはこの地上に実現するであろうところの、キリストの真理の形態をとっているからである。」(一八七六年六月第2章1)

この宗教観について批判的・嘲笑的に云々してもはじまらない。彼は全身全霊をこめてそのように認識・判断していたというだけである。一般的にいって、ある宗教の優越性や普遍性を判断する根拠を、時空の限定された一つの時代に生きるものには、掌中にすることは不可能だといっても過言ではない。いかに壮大にして華麗な教義体系をでっち上げようとも、独断論だと非難できないまでも、客観的な認識を形成することの困難な領域にあるということである。

同じように、国家間の戦争、民族間の憎悪や相互否定の欲求にもとづく抹殺・排除の衝動、宗教の優位性・絶対性の主張に付随する争い、歴史上形成されてきた民族や国家間の差別・蔑視の観念や感情——これらは、ドストエフスキをきびしく呪縛した事件であり、感じ、考える一人の人間にとって、頭のうえに重石をおかれる形での日常的な推移にほかならなかったのである。

スラヴ民族の団結、汎スラヴ主義は、当時におけるトルコ帝国との葛藤、植民地支配されていたバルカン諸国などの独立の動きと連動した。いわば民族と宗教との歴史的相克・葛藤の厳しい現実が蠢いていた。それが対トルコ戦争の、いわばロシア正教、ギリシア正教などの正教信奉諸国と、イスラム教のトルコとのあいだの宗教戦争の濃い影を落としていた。また歴史的にたどられるある民族におけるキリスト教から回教への改宗またはその逆などの様相と、同民族における権力を掌握した階層の他の民衆に対する抑圧・被抑圧の関係が複雑に錯綜した。それらは第一次世界大戦以降の二十世紀にまで連綿とつづいてい

る事態である。現在のユーゴスラビア解体後の政治状況は、マケドニアが象徴しているごとく、国家と民族の問題が解決不可能なままに二十一世紀に持ち越されるのは確かであろう。

とくに、古くから「火薬庫」と称されていたバルカン半島の民族的・宗教的問題は、宗教戦争、あるいは領土問題が前面のりだすと、かならず「聖戦」という形をとることにならざるをえなかった。また当然のように、民族主義の発揚、正義として聖化された戦争遂行の論理が極度に増幅されると、きわめて差別的・感情的な優劣論理が横行する。柔軟な発想と想像力を駆使できるドストエフスキですら例外ではなかった。異民族間・諸宗教間の歴史的・現実的葛藤やその推移のなかには、異常な心理的なフラストレーションや心理的愛憎にまで純化された人間同士の「憎悪の哲学」が渦巻くものだと一般的にいうことができる。というよりも、現実の底の底に降りていこうとするとき、彼は戦争のもたらすさまざまな悲惨を認識しつつもきわめて好戦的になり、極度に民族差別的にすらなっていた。トルコ人の、独立をもとめる対ブルガリア戦争における残虐行為の例示を何度も何度もくりかえすことなどによく現れている。人々の運命を弄ぶかのようにみえる現実の動向をかきつづけることは、いわば彼におけるロシアとロシア人、スラヴ諸民族、ヨーロッパの運命を凝視することでもあった。ところが、視野を局限された「正教の事業」という理念に引きずられたとき、透徹していたはずの彼の論理と想像力のはびやかさを欠いた。なにかに目隠しをされていた。おぞましいというほどの文章をつぎに瞥見しよう。

「それでは、その『最高の意味におけるスラヴ思想』とは、なんであるか？ そのなんであるかは、今やすべての人々に明々白白々になってきた。それは、何よりもまず、すなわち歴史的、政治的、その他のあらゆる論議にさきだつて、まず犠牲である。同胞のために自己をさえ犠牲にせんとする要求である。スラヴ民族中の最強者が、弱きものの味方たらんとする自発的義務の感情である。ただし、それらは自由と政治的独立を保ちながら、弱きものをおのれと同等のものとした後、それによつて将来キリストの真理の名における、いいかえれば、全人類への利益と愛と奉仕を目的とする、偉大なる全スラヴ族の大同団結を基礎づけ、全世界のあらゆる弱きもの、虐げられたるものを擁護することを条件としているのである。」（一八七六年七月・八月第4章6）

もちろん、彼は逆説という意識でかいているし、反対意見も想定しつつ、いわば対自的にかたつてゐる。しかし、現実主義者、論争者としての彼は、いささか堅苦しい姿勢をみせ、保守的論理の一本道を走つてゐる。これが小説世界であれば、作中人物が二人で話し合つていたり、数人の場合であれ、かならず相手からおそるべき論理や発想で論破され、さらには互いの主張を緻密にあるいは極度の飛躍した形の論理構造で深めていったに相違ない。

バルカン半島を含めたスラヴ民族の問題ばかりでなく、多民

族国家ロシアの苦悩は、過去にあつても、彼の死後の二十世紀にあつても、つねに国内の少数民族との関係を自立的に、民族自決権的に、自由な選択のかたちにおいていかに民族の存立の根拠を相互的に獲得するかということである。また、宗教思想であれ、「社会主義」思想であれ、イデオロギイ的な側面における人間論や幸福論や社会観・世界観などをどのように理論化していくか、諸民族の相互尊重において連合体をどのように構築していくか、ということに集約されたといつてもよい。ドストエフスキイは、六一年の解放以前の農奴制と帝政の諸矛盾はもとより、監獄で多民族構成の如実な体験を底の底から味わつたのであつた。そこにある種の偏見があれ、彼は、監獄という狭い空間のなかで、飾りのない個人的人間の具体的な大きな塊においてそれらを肌で感取したのであつた。

ところで、右に素描したロシア人の使命、スラヴ民族と近東問題の未来の方向、キリスト教（ロシア正教）の關係をならぬく論理はつぎのごとくである。

「ロシアは彼らをお互い同士の争いから救つて、まさしく、彼らの自由のために、番兵の位置に立つだろう。ロシアは全近東とその将来の秩序の番兵に立つのだ。最後に、ロシアは近東に新しき理念の旗をかかげ、その新しき意義を近東の世界ぜんたいに説明する。ただロシアのみが、それをなす力を有しているのだ。なぜなら、近東問題とははたしてなんであるか？ 近東問題はその本質において、正教の運命の解決である。正教の運命は、ロシアの使命と結び合

わされているのだ。しからば、この正教の運命とはなんであるか？ 地上の権力のためにすでに早くからキリストを売り、人類をして顔をそむけしめ、かくのごとくして、ヨーロッパの唯物主義と無神論のおもなる原因となったローマン・カトリックは自然の数として、ヨーロッパに社会主義をも生みだした。(中略)かしこに失われたキリストの姿は、正教においてその清浄無垢の光を、完全に保ったのである。近く来らんとする社会主義に向かつて、新しき言葉が東方から射しのぼって、おそらくヨーロッパの人類をふたたび救済するであろう。」(一八七七年十一月第3章1)

もとより彼自身、このような議論や論法は「狐つき」の言葉や論理だとよばれていたこともよく承知していた。にもかかわらず、彼の志向では、正教のロシアの使命を達成するために近東世界の中心としてのコンスタンチノープルがなによりも必要であった。近東戦争を遂行するために、ロシアの民衆の共同性と正教の新しい言葉を聖化せざるをえなかつたのもあった。それ以降の歴史にてらしてみても、はたまた現代の立場からみても、一種の度し難い狂信と極度の民族主義に堕していることなど批判的・嘲笑的にいうのは容易すぎるほどであろう。

ところで、みぎの引用にしめされているように、彼は「社会主義」にきわめて敏感であった。というより、それらの認識は、彼の論敵であるヨーロッパ派に対する彼自身の思想的根柢の構築と並行していた。彼は未来の人類は科学的根柢のうえに組織されるとする合理主義や「社会主義」に対してつぎのようにも

批判する。

「人間は私有財産というものの絶対的な権利や、家族や、自由を拒否することが困難なばかりでなく、不可能でさえある。社会主義者たちは、個人としての未来の人間から、あまりに多くの犠牲を要求しすぎる、人間をそんなふうにしてしまうには、恐ろしい暴圧によるほかはなく、猛烈なスパイ制度と、最も専制的な権力による不断の統制をもつてのぞまなければならぬ。」(一八七七年二月第2章3)

ここには恐るべき先見性と予言がある。スターリン体制はほぼ彼の信じていた「社会主義」にほかならない。半世紀ほど未来を予測したそうした驚くべき側面があれ、キリスト者・ロシア正教の信者として、けれども、彼はスラヴ民族問題のみぎのよう信じていた。これがキリストを何よりも愛した天才的にして稀有な大小説家の一面にほかならなかつた。歴史の推移をそれなりに知っている後知恵からすると、思想家として、イデオログとして、これほど滑稽な、けれども必死の貌をさらしているありようが示されている景観は、独特の構図だとしかいいようがない。われわれ凡百の凡人を安堵させる人間の真実の一面だということすらできる。表現者、小説家、芸術家に関して、何かしら、深くて大きな示唆ないしは啓示を感受することもできそうである。

スラヴ民族主義のさらなる問題は、西側に位置する西欧との関係であり、南側に位置するトルコなどとの確執であるが、西

欧やトルコとの関係はべつの論文において異った論点から論じることになる。この論の終りに、プーシキン記念祭における講演で西欧派についての認識などを検討することにして、少数民族の問題においては、論点が明快なのでここではユダヤ人問題を素描する。

ユダヤ民族のつぎのようなあり方に対抗してスラヴ主義が対置されていたわけではない。また、イエスを売ったユダの子孫として憎んでいたのでもない。ユダヤ人は「一人のこらず、ひたすらにメシヤを待っている」とのことである。彼ら一同は、メシヤがふたたび自分たちをイエルサレムに集め、諸民族を剣の力によって、彼らの足下にひれ伏させるものと信じている。「一八七七年三月第二章」そして、祖国に帰るためにいつさいのものを黄金にして保存し、その間には「国家のなかの国家」を形成して自己保存しているのだ、そのように伝説できいたと彼は周到に論陣をはっていったのである。

ドストエフスキイがユダヤ人問題を云々するとき焦点になったのは、「国家のなかの国家」を形成するうえで生ずるさまざまな問題もさることながら、農奴として長い間非人間的に抑圧されていた農民、貧しい市民などと富裕なユダヤ人の対比においてでもあった。農奴解放後の、民衆の生活とおかれた環境の現実的実態とその救済の方法を加味したものであった。つまり、ロシアの民衆のありようを厳しく検証しないままに、一つのイデオロギイや抽象的な観念・理念によって片づけて、ロシアの現実や未来について理想主義的にかたる人々の根なし草性に対して彼は正面から攻撃したのであった。そのとき、一部の

ユダヤ人の経済上のある種の欠点や短所に対する非難は確かになされていたのであった。「ヨーロッパいたるところの取引市場で、ユダヤ人が王者の位置を占めている」という類の認識が開陳された。つまり、ユダヤ人個々の問題ではなくて、全世界を経済力で掌握しようとする「ユダヤ的理念」を問題にしていたのであった。

細々と検証はしないが、彼のユダヤ人問題についての批判者の手紙も七七年三月の項などに詳しく掲載されているので、右の引用同様に参照してもらいたい。彼の論理には明らかな矛盾やある種の偏見があるが、差別主義者でないことは明白であろう。その攻撃の主要な矛先は、くりかえしていえば、へ地下室人の批判のように、理想主義や科学主義などに対するものであった。ロシアの民衆の具体から発想しないもの、歴史的過程において虐げられた民衆、農奴解放後も教育をうける機会を奪われていた彼らが無惨にも搾取するもの、それらの一部をユダヤ人の一群の人々が荷担していたこと、それらに対する論難であった。つまり、ロシアの現実的動向、実質上の階層関係、新たに出現したいわゆる雑階級、これらを具体的に俎上にあげるのではなくて、彼が「西欧的」、抽象的な思考とみなした理念で対応していた勢力に向けての対峙法なのであった。

『作家の日記』には、優れた短篇小説群ばかりでなく、啓発的で懐の深い文学や文学者についての文章もあふれている。肩肘張った頑迷固陋ともいえる時事批評の文章ばかりを引用して、大いに辟易したので、ここで、それらの滋味のあり、魂を美しく磨きあげてくれる文章を引用することにする。

「われわれは一八四八年のパリ革命よりもよほどまえに、こうした思想の魅惑的な感化に捉われていた。わたしはすでに一八四六年にベリンスキイに勧誘されて、この来るべき『更生せられたる世界』のいつさいの真理と、来るべき共産社会のいつさいの神聖さに身を献げたのである。」（一八七三年一六）

「世界中さがしても、この作品より深く力強いものはない。これは今のところ、人類の思想の最も偉大な、最後の言葉である。人間が表現しうる最も辛辣な皮肉である。（中略）『それ、ここにわたしの人生に関する結論がある……きみはこれをもつてわたしを非難することができるか？』と、黙ってドン・キホーテをさし出すこともできるであろう。」（一八七六年三月第2章1）

「わたしはその後永久に忘れることができない。それはわたしの全生涯を通じて、最も感激的な一瞬であった。懲役に従っても、これを思い出しながら氣力を奮い起こした。現在でもこれを想い起こすたびに、感激を禁じ得ないのである。さて、それから三十年たつて、わたしはついさきごろ、病めるネクラソフの枕もとにすわりながら、この瞬間を残らず想起して、ふたたびこれを親しく体験するの思いであった。」（一八七七年一月第2章3）

これらの文章を味読すれば、既述のように、ドストエフスキイという作家の缺状におおきくひらいた自己分裂の深淵が如実に直覚されるにちがいない。小説でないかぎり、彼はこの自己矛盾と自己乖離をまったくつなぎ合わせようとしなかった。というよりも、十九世紀後半のロシアに生きる人間として、この矛盾そのものを自分の精神のなかで、ありうる形の数倍以上に拡大しながら生きようとしたといっても過言ではない。いや彼は文字通りそのように生きていたのであった。

表現をかえていえば、『日記』の読者は裁判問題に彼が拘泥しつづけているのに対して、腑に落ちない思いを抱くのもかもしれない。彼は小説『罪と罰』はもとより、さまざまな文章のなかで、『罪と罰』の問題に、つまり宗教的な意味での罪や罰と、法律上の罪や罰などについて、独自の考え方を抱き、それについて熟考していた。また、一八六一年の農奴制の撤廃が社会的な大事件であり、それに付随するように解放された農民たちが裁判所で絶大な力をもつ陪審員として採用されたことも、考察の一素材となった。この社会的な諸層の変動が彼にはなによりも解明さるべき問題として眼前にひかえていたのであった。それとともに、あるときには裁判の進行中に、彼の人性についての鋭敏な直覚をもとにして、事実検証の展開が、有罪から無罪への大きなきつかけとなった裁判すら出現した。

これを大雑把に俯瞰すると、近東戦争にたいする狂信的な対応の仕方と、幼児虐待の罪で有罪となった女性の擁護者として真摯に闘った彼とが、いわば矛盾なく共存している一種奇妙なありようが繰りひろげられている奇観である。

さて、論をさらに拡げて考察していきたい。ドストエフスキイの願いは、ベリンスキイやドロリュエボフ、ネクラソフなどの決裂以降、二十数年間にわたる西欧派とスラヴ派の思想的・政治的敵対関係の解消と両派の協調ということであった。容易な精神的事業でないからこそ、彼はずっと念頭においていた。けれども、それは単純な思想的・文学的な、いわば一種の文学党派的な軋轢とそれを基礎とした協調の志向ではない。ドストエフスキイのベリンスキイに対しての違和感はともかく、右にも引用したように、ネクラソフに対しては、死の直後にも詩人として、文学者としての深い親愛の気持と高度な文学的認識がかたられたのであった。もとより、基本的には、その認識の底に両者のあいだでいささか隔たっている民衆論が介在しているが、党派の、文壇の勢力関係などに矮小化できない、人間的な滋味のある含みと独自の文学者の感性が横たわっていて、それを云々すべきなのである。

それらの複雑な関係性のなかで、表面上、死の歳の直前におこなわれたプーシキン記念祭における講演（一八八〇年八月第一、二章）で和解の端緒が掴みとられたのであった。では、彼はプーシキンをどのように把握していたのか。つぎの四点に集約される。長い引用だが、きわめて的確な認識なので列挙する。第一、「プーシキンは、その深い洞察力をもった天才的な知性と、純ロシア的な感情によって、社会の地盤から歴史的にもぎ離され、民衆を高めから見下ろしているわがインテリゲンチヤの、最もおもなる病的現象を発見し、指摘したところの第一人者である。」第二、「彼は直接、ロシア精神から生まれ、民衆の真理

の中に、われわれの地盤の中に現われ、みずから発見したロシア的美の芸術的典型を、われわれに与えた最初の人である。」第三、「彼をのぞいてはこのいかなる作家にも見いだすことのできない特殊な芸術的天才の一面、——すなわち全世界的共鳴の才能、他国の天才に完全に同化する才能である。」第四、「この才能は、完全にロシア的な、国民的な才能であって、プーシキンはただそれをわが全民衆と共有しているのであり、完全無欠な芸術家として、この才能の最も完全な表現者だからである。」つまり、彼はロシア民衆の天才は、全人類的結合、同胞愛の理念を諸国民とくらべて格段に多く内包しているという持論を展開していたのである。この観点こそ、彼がプーシキンをおして主張したかった認識にほかならない。

スラヴ派と西欧派の差異の核心は、右のプーシキン論のなかに明快にのべられているので重複を避け、その統合の努力の核心と相貌をつぎにみておきたい。

「まさしく彼の詩魂の国民性、その向後の発展における国民性、現在にひそんでいるわが未来の国民性が、予言的に表現されているからである。実際、究極の目的において、全世界性と全人類性に対する希求にあらざして、はたして何がロシア国民の精神力であるか？ 完全に国民詩人となつて、民衆の力にふれるやいなや、プーシキンはただちに、その力の偉大なる未来の使命を予感したのである。ここにおいて、彼は洞察者である。ここにおいて、彼は予言者である。（中略）」

もしプーシキンがいま少し長命したならば、現在見受けられるような、われわれ相互の間の誤解と争いは、少なくともなっていたに相違ない。しかし、神の裁きは別様であった。プーシキンはその力の延び行く最中にたおれて、疑いもなくある偉大な秘密を、墓の中に持ち去ったのである。かくして、今やわれわれは彼なき後にこの秘密を解かんとしているのである。」

もとより、スラヴ派と西欧派の眞の統合は成立しなかった。それほど容易で、簡単なものではない。二十世紀にまでもちこされ、一九一七年の革命である回答が与えられたような機運が生じたとはいえず、それとてもあえていえば、それから七十年間ほどしか持続しない《過渡的》で括弧つきの状況にすぎなかった。もとより、一つの壮大な思想や理念の実験、死と苦痛、逆に希望と理想などが混交し、歴史というものの足跡の意味を深い底から反省させられてきた類の目眩く過程ではあった。また同時に、むごたらしい教訓と絶望などが合わない合わされた歴史的試練にほかならなかつたのである。

論を『作家の日記』の刊行の経過に移してみる。ドストエフスキイは『作家の日記』の出版にあたって、かつての流刑者としてのさまざまな配慮をいられていたようだ。それは、一八七九年三月の「請願覚え書」にも少しあらわれている。ペトラシェフスキイ事件により四九年に剝奪された市民権が五六年シベリア第七常備大隊の下士官から少尉補に昇進したとき勅令によって回復されたこと、にもかかわらず、皇帝直属官房第三部

のもとで警察の監視下にあつたことが判明したので、この監視を廃止するように請願していたのであつた。その文書につきのような一節がある。「小生は数百ペーシを費やして、おのれの政治的・宗教的信念を述べましたし、また述べつつあります。これらの信念は、小生の政治的潔白を疑わしめるようなものではないことを、小生みずから庶幾している次第であります。」当時の申請様式であつたらうが、出版申請書などの「退職少尉」肩書きにも彼のこうむつた苦痛が現れていた。

ところで、出版管理局に提出された七五年十二月の請願で、『作家の日記』の意図のいくらかや価格などがわかるのでつぎに引用しておく。

「来たる一八七六年より、小生の著作『作家の日記』を、月刊として発行することを思い立ちました。大きさは印刷一台もしくは一台半、二段組でありまして、小生がロシアの作家として現実に体験したすべての印象に関する報告、ならびに小生の見聞し、通読したものいつさいに関する報告を掲載したいと望んでおります。それと同時に、小生の刊行物にたいする予約募集（年間十二号全部につき二ルーブリ、送料別）の広告をするともに、小売販売をもいたしたく存じております（一部二十コペイカ）。」

価格は翌年一部二十五コペイカに変更されるが、他の請願では「同一の題名、同一の期間、同一の体裁で、事前検閲なしに発行する」許可をもとめたり、死去により一号のみしか実現し

なかつたけれども、八〇年十月には「来たる一八八一年より復活させたい意図を有して」いるので刊行の許可をもとめた請願書を提出してもいたのであった。

すでにさまざまな局面で素描したように、執筆者・表現者としての彼は、そのときそのときの思考と方向性において、自在にかつ適切に、読者に語りかけ、質問に答え、親切すぎるほどにさまざまな事情について解説し、自己の思いを徹底的に貫きとおしたり、あるいは一転して短篇小説を書き進めたりしたのであった。検閲の苛酷な帝政下のジャーナリズムのなかで、自己のひそかにめざした思想家・文学者としての役割を充分すぎるほどにこなしていたことが判明する。それこそが、彼のひめられた本当の意図であったといえよう。

アンリ・トロワイヤの『ドストエフスキー伝』によると『作家の日記』は思いがけない成功をおさめ、「一年目は予約購読者二千、店頭でもそれと同じ数さばけたし、二年目になると予約客は三千になり、書店では四千部も売れる。なかには再版をつづけた号もあった。」(村上香住子訳)という。米川正夫は、その全集解説に「二年目には六千部に達した。」と記しているのである。発行部数において、さらには読者の反響の手紙などにも鼓舞されて、彼自身自信がでてくるとともに、熱烈に支持されたという実感をもっていた。それゆえに、彼は一種の現実的・思想的・政治的動向の予言者的な位置を獲得するまでにいたったのである。

名声と大衆的な支持をえた彼は、たゆみない努力をさらにつづけた結果、ついには「一八七八年、元徒刑囚はアカデミーの

国語文学部門の会員に任命された。」(右同)のであった。この記述にはいささか批判的なおいがあれ、彼自身は、自分の文学を書きつづける今一つの根柢を獲得したと感じていたはずである。ともあれ、この成功によって、それまで長い間苦しみつづけた借金もなくなり、いわば、世俗的な意味において晩年のゆるぎない栄誉や名声などが獲得されたということになる。そのような栄誉が彼にとってどのようなものであったかはともかくとして、一定の経済的、家庭的な安定のもとで、それまで構想しつづけたつぎの新たな長篇小説の執筆へと駆り立てられたことは疑いない。

七七年十二月刊行の『日記』の最後に彼はつぎのように記していた。「発行を休むこの一年間に、わたしはさつそくある一つの芸術的労作に従事する。それは『日記』を刊行しているこの二年間に、いつともなく知らずしらず、わたしの胸中にできあがったものである。」彼は七九年一月の「ロシヤ報知」に連載するためにプランを練り、執筆のために精神の努力を集中した。つまり『カラマーゾフの兄弟』の眩暈すべき世界への架橋である。小説家としてのたゆみない精神生活が見事なまでに髣髴とするのである。

彼の最後となった長篇小説の第一部は、八〇年十一号で完成するが、この年すでに引用したプーシキン記念講演会で講演をして、この年一号のみ発行された『日記』に発表した。既述の請願通り、さらに彼は八一年に第一号を刊行する。刊行日は一八八一年一月二十八日で死の翌日のことであった。この号の文章を彼はつぎのようにはじめている。「いやはや、三年間も沈黙

を守ってきた後で、わたしの『日記』の復活号に、経済論文をひっさげて登場しようとは！」もとより、いわゆる経済論文もあるにしても、内容はこれまでの文章と同質の多様で尖鋭なものであった。また『カラマーゾフの兄弟』の表現レベルを延長しつつ、さらに新たな考察の芽を孕んだものでもあった。彼は死の床にいたるまで表現しつづけたのである。

「アジア、アジア的なわがロシヤ、——なにしろ、これもやはりわれわれの病める根源であつて、これは新鮮化するどころか、完全に更生させ、改造する必要があるのだ！ 原則、新しい原則、事態に対する新しい見解、——これが必要なのだ！」

彼は一生涯、ロシア、またロシア人について全体的に認識するのは不可能である、しかし、ロシア人としての自分を出発点として、一步一步解き明かす努力をつづけようとしたのであつた。『作家の日記』は、彼の懐抱した精神世界の見事な顕現にほかならなかつた。ジャーナリスト、イデオログとしての現実主義者が、芸術家によつて超克される克明な内的軌跡であつたともいいかえることができる。

結論的にいえば、ドストエフスキイの批評・評論、随想の文章群は、足下の問題から世紀をこえた主題をも包含しつつ無限な多様性の貌が開き示されている。つまり、細々した現実的諸事態が彼の興味をひき、彼の生と思考に忠実に跡づけられた文章群として開花した。それがジャーナリストイックな独特な傾

向をゆうする一面的、ある場合には独善的なものであれ、『作家の日記』および『論文・記録』（これらの諸巻については別論文参照）に収録されている諸見解は、肯定・否定を含めて、十九世紀のロシアの諸相を克明に描くことにおいて卓越している。また、現在の観点からして無意味なポレミック、歴史過程によつてすでに超克された思想的立場、民族主義的思想家としての理念の構造、表現者としての存在の価値の減少、時間のなかで埋没し、無意味な沈澱物と化された認識ばかりだと否定することはできない。そこには、表現する主体の確乎たる息吹や心臓の鼓動が脈打っている。表現するもの、時空の限定のなかで創造するもの・きびしく自己を鞭打ちつつ精神活動を展開するものの名状しがたい命運が顕現されているのである。

これらの文章群は、いわばかえがたい「現実性」に固執することによつて、奇妙な歪みをうきぼりにしているにしても、それを他の躍動する力によつて次々に振り捨てて、二十一世紀の文学と芸術と精神の世界にぐんぐん入りこんでいく風情である。そのような不可思議な力を内在する、ドストエフスキイ世界の十九世紀から二十一世紀の三世紀にまたがる生命の持続の秘密を後世の読者が解き明かすことは、芸術、文学を初めとする抜群の精神生活の奥深くに隠された謎めいた力を開示する努力にほかならないのである。

（たていし はく・文学部教授）